

英語教育における意味解釈指導の再考 — 語用論的能力の構築について —

A Reconsideration of the Instruction of Semantic Interpretation in English Language Education — With Respect to Building Pragmatic Competence —

岡本 芳和
Yoshikazu OKAMOTO

〈要旨〉

近年、英語教育においてコミュニケーション能力の発達をめざした授業及び指導が盛んに行われてきた。これは、外国語教育を通じて、言語や文化に対する理解を深め、個人の積極的なコミュニケーション能力をはかろうとする学習指導要領の目標に依存している。学習者のコミュニケーション能力を発達させるには様々な方法が考えられる。しかしながら、適切なコミュニケーションを図るためには、正確な英語の知識をもっていること、英語という言語が持つ社会的文化的背景を知ること、さらに、そのことばが発話される状況を理解することなども重要になる。本稿では、以前高校生に行ったアンケート結果について再検討をし、彼らにとってどのような指導が必要か、また、どのような指導を求めているのかを再考する。結論として、日本の英語教育において、多くのインプットを与えるだけでは効果がなく、正確な意味解釈や適切な言語使用を指導することが重要であることを述べる。

〈キーワード〉

言語習得、インプット、アウトプット、意味解釈指導、語用論的能力

1 はじめに

近年、英語教育においてコミュニケーション能力を向上させる授業及び指導が盛んに行われてきた。グローバル化が進む現在の日本の状況を考慮すると、このことは必要不可欠かもしれない。しかしながら、英語コミュニケーション能力を向上させるだけの教育では不十分であると考えられる。円滑なコミュニケーションを行うためには、学習者は正確な英語の知識もっていること、英語という言語が持つ社会的文化的背景を知ること、ことばが発話される状況を理解することなどが必要になる。本稿では、正確な英語の知識を必要とした意味解釈指導の必要性や円滑なコミュニケーションを行うために必要な語用論的能力の構築について考えてみたい。

2 インプットとアウトプット

2-1 インプット仮説

英語教育においては、教師が学習者にどのようなインプットを与えるかが重要になる。教師が学習者に適切なインプットを与えることができるなら、学習者は各々の英語能力を向上させることができる。理解可能なインプットを学

習者に与えることの重要性を説いたのはKrashen (1982, 1983, 1985) である。Krashenは言語を習得する最も良い方法はインプットを通じて、メッセージの意味を理解しようとすることであると主張し、また、現状の学習者の能力を $i^{(1)}$ とすると、 $i+1$ の内容を含むインプットを理解した時に言語習得が起こると説明した。

2-2 インプットの重要性

Krashenの提唱するインプット仮説には一部賛成することができる。また、教師が学習者に理解可能なインプットを与えるという重要性も理解できる。そこで、教師が学習者に与えるインプットは次のような特徴を持っていないなければならない⁽²⁾。

(1) インプットの特徴

- ・ $i+1$ のレベルを含み、理解可能である
- ・ 学習者にとって興味深い
- ・ 関連性がある
- ・ 適切な量である

インプットのレベルは簡単すぎても、逆に難しすぎてもいけない。教師は現状のクラスの学習者のレベルを考慮して、材料を選択しなければならない。また、学習者にとって興味深いもの、授業のトピックと関連があるものでなければ効果が出ない。インプットの量も重要である。少なすぎても学習者の能力向上にはならないし、多すぎても学習者の負担になってしまうかもしれない。学習者のレベル、学習状況を十分に把握し、適切な量を与えなければならない。

日本の状況を考慮すると、学習者はインプットの多くを教室でしか獲得することができない。日本国内で、教室外でインプットを得ることは難しい。というのは、教室外ではほとんど英語を使用する機会がないからである。従って、教室外で学習者の効果的な学習ができるように、教師はインプットを与えなければならない。

2-3 インプットからアウトプットへ

Krashenの仮説によると、インプットを学習者に与え続けると、アウトプットが自然に現れるという。しかしながら、日本の教育環境を考えると、インプットを与えているだけでは、アウトプットにはつながらない。学習者のアウトプットにつなげるには、やはり教室内の学習者の活動しかなく、そこで教師が学習者にいかに効果的に練習させるかが重要になる。

最終的にアウトプットにつなげることが重要なのは理解できるが、学習者がインプットをいかに正確に理解し、知識としてそれらをいくつも蓄えておくことが重要である。このようなプロセスがなければ、円滑なコミュニケーションにつながっていかない。そのためには、文法指導に基づいた意味解釈指導が必要である。学習者の能力が上がってくればくるほど、複雑な内容を理解するには、この指導は不可欠である。

3 テキスト分析と意味解釈指導

3-1 アンケート調査とデータ収集

どのような観点でテキスト分析を行うかについて、アンケート調査を行った⁽³⁾。その詳細は以下の通りである。

(2) アンケート調査の内容

- ・ 対象者：大阪府下の高校2年生120名
- ・ 内容：英語を学習しているときに最も苦手としている文法の分野を聞く。

この調査によって、高校生が最も苦手としている分野は関係詞であることがわかった。そこで、その高校生が授業で使用している文法のテキストを基にテストを作成して、

高校生にそれを実施した。

3-2 テキスト分析と誤答分析

当時市販されていた8つの英語検定教科書の中から、関係詞が使用されている文をすべて取り出し、関係詞が使用されるパターンごとに細かな分類を行った⁽⁴⁾。そして、それぞれのパターンごとにその使用頻度を調べた。テキスト分析で得られた使用頻度とテストを実施したことで得られたデータに照らし合わせてみると、次の事がわかった。

- (3) 使用頻度が低い項目は、その項目に関する問題での正答率が低い。

当然のことといえば、そうかもしれないが、これはインプットの量が少ないので、学習者がその項目を学習し、習得する機会も減ることを意味している。

紙面の都合上すべてをここで説明することができないが、一例を挙げてみたい。

(4) テスト問題の一例

I wrote down every phrase in his speech () he stressed.

(4)の問題はカッコに関係代名詞を選択させる問題である。この問題の正答率は24.2%であった。多くの学習者が答えにwhichを選択していた。この文における先行詞はevery phraseで、his speechではない(先行詞にeveryがついているので、thatが正解)。whichを選択した学生は先行詞をhis speechと考えている。この誤答は学習者が正確な英語の知識を持たずに、この文を解釈したために生じたと考えられる。この文で使用されている関係代名詞のthatは、いわゆる、「関係代名詞特別用法のthat」と言われているものである。この特別用法のthatは、私がテキスト分析によって得た関係詞の例、618例のうち27例(全体の4.4%)しかなかった。この数字は(3)の内容を支持しているといえる。

3-3 意味解釈指導

学習者の誤答を防ぐには、授業中の指導を充実させなければならない。学習指導要領に基づいて、授業中の指導に話す活動を行うことは問題ないが、学習者が正確な英語の知識をもって活動を行わなければ、能力向上には結びつかない。文法指導に基づいた意味解釈指導も必要である。そして、正確な知識を持って、文の意味を理解した後に、それをアウトプットする⁽⁵⁾。このプロセスは次のように図式化できる。

(5) インプットからアウトプットへ



日本の英語教育の現場を考慮すると、インプットからアウトプットにつなげる際の指導というものを充実させなければ、正確なアウトプットにはつながらない。教師はその点を考慮して、授業運営をしていく必要がある。

4 語用論的能力の構築

4-1 学習指導要領

文部科学省の学習指導要領に記載された内容に次のような文言がある⁽⁶⁾。

- (6) 授業においてコミュニケーションの能力の育成を図るためには、言語の使用場面を明らかにし、具体的な文脈を想定した上で、指導に当たることが重要である。
(高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編, p.40)
- (7) 実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動においては、具体的な場面や状況にあった適切な表現を自ら考えて言語活動できるようにすること。
(高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編, p.113)

この文言に見られる「言語の使用場面」、「具体的な場面や状況にあった適切な表現」といったフレーズはまさに語用論的能力⁽⁷⁾に関係していると考えられる。やはり、円滑なコミュニケーションを行うためには、このような能力も必要になってくる。

4-2 アンケート調査と結果

過去に行ったアンケート調査⁽⁸⁾を基に、高校生が英語教育に対してどのような意識を持っているのかを再確認したい。

(6) アンケート調査の内容

- ・対象者：大阪府下の高校生196名
- ・内容：英語教育において一体どのような指導を望んでいるのかを聞く。語用論的能力を必要とする質問項目をいくつか取り入れた。

このアンケート結果をまとめると次のようになる。

(7) アンケート結果

- ・コミュニケーション能力を身につけようとする目標

がある（全体の70.4%）。

- ・コミュニケーションにおいて、相手の言っていることを十分に理解し、適切な返答をしたい（全体の73.4%）。
- ・語用論的な能力のもとになる発話の理解や言語使用の適切性を授業に取り入れてほしい（全体の47.9%）。

まとめると、コミュニケーション能力の向上をめざし、学習者は英会話など実践的な指導だけでなく、コミュニケーションに必要な知識や相手の発話を理解するという基本的な能力の指導も必要としていることがわかる。

4-3 語用論的能力の構築に向けて

一般的に、人間は語用論的なルールが分かっていることができない。実際にはコミュニケーションを成立させることはできない。それは、相手の発話の理解をしなければ、その相手の発話に対して適切な応答できないからである。母語話者は、その第一言語が使用されるコンテキストの中で、無意識に第一言語の文法や意味を理解し、これらのルールに従って、それぞれの場面の中で適切に言語を使用していると考えられる。これは、コミュニケーション能力の向上を目標とする第2言語教育や外国語教育においても同じ事がいえる。

しかしながら、語用論に関する専門知識を学習者に教えることはできない。現場教師は学者でないが、ある程度の語用論に関する知識やルールを身につけ、それに基づいた授業運営をすることによって、よりよい学習環境の下で英語学習を提供することが可能になる。そこで、Elliot (1999: 161) では、語用論的知識に不足する教員に対して、4つの提案をしている。それらは、①教師は語用論的能力を発達させることが記された情報のある教材を見つけること、②語用論的知識を持っている教師を見つけ、その知識について意見交換をすること、③語用論的な使用法を研究した論文を読み、勉強したことを授業での活動に役立てること、④自然な言語行為を生むようなメディアを教室で使用する事である。語用論的知識になじみのない教師は、このような提案を進んで受け入れるのは難しいであろう。また、教育現場での職務に毎日毎日追われ、このようなアドバイスを受け入れ、研究する時間がないと言う教師もいるであろう。しかし、教師は不利な状況に置かれたとしても、時間を見つけ、教師自身の教授の仕方や授業の環境作りも適切かどうかを振り返らなければならない。

語用論的能力の構築というのは、一手段であって、絶対的なものではない。他にも学習者の英語力を向上させる方法はいくつもある。1つ提案として考えてもらいたい。

5 まとめ

本稿では、英語教育における意味解釈指導の重要性や語用論的能力の構築の必要性について説明してきた。学習者のコミュニケーション能力の発達を目指した授業や指導法が盛んに行われていることは認めるが、円滑なコミュニケーションに結び付けるには、正確な知識を身につけることやことばが発話される状況を理解することが必要である。Krashenはインプットの重要性を説いたが、日本の教育現

場を考えると、インプットを与えているだけでは学習者の英語能力は向上しない。インプットをアウトプットへといかに結び付けるのが重要で、それが成功してはじめて学習者の能力向上につながる。また、学習者の語用論的能力の構築やその能力の向上については、前項で論じただけでは不十分である。まだまだこれから深い議論と研究が必要であろう。

注

- (1) このiとは、interlanguage (「中間言語」) を意味する。Selinker (1972) を参照。
- (2) 日本の教育現場に照らし合わせて考えると、ここでいうインプットとは授業を通じて教師が与える教材のことである。
- (3) このアンケート調査は1998年秋に行われた。アンケートの調査報告はOkamoto (1998) で一度行っている。今回はそのデータを再検討した。
- (4) Okamoto (1998: 59) では、関係詞が使用されている文を28パターン挙げた。
- (5) ここで使用する「アウトプット」とは、スピーキング活動における学習者の発話だけでなく、ライティング活動における学習者の文章作成も含んでいる。
- (6) (7)の引用は中学校学習指導要領 第2章 第9節外国語からのものである。高等学校だけでなく、中学校の学習指導要領にも同様な指摘があることを説明するために引用をした。
- (7) 「語用論」(Pragmatics) とは、話し手と聞き手を取り巻くコミュニケーションの場面、すなわち、コンテキストに沿って、ことばとその意味を考える学問のことである。そして、語用論的能力とは、ある場面の中で使われる発話を理解し、それに対し適切な対応を示し、運用まで結びつける能力であると定義する。特に、この能力には言語行為 (Speech Act) が関係している。
- (8) このアンケート調査は1999年夏に行われた。このデータについて再検討をした。

参考文献

- Andrew, D. C. (1999). Speech Acts. In Sandra, L. M. and Nancy, H. H. (eds.), *Sociolinguistics and Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bachman, L. (1990). *Fundamental considerations in language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Elliot, L. J. (1999). Some issues in the teaching of pragmatic competence. In Eli, H (ed.), *Culture in Second Language Teaching and Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Kenneth, R. R. (1999). Teachers and students learning about requests in Hong Kong. In Eli, H (ed.), *Culture in Second Language Teaching and Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小池 生夫 (監修). (1994). 『第2言語習得研究に基づく最新の英語教育』. 東京: 大修館書店.
- Krashen, S. (1982). *Principles and Practice in second language acquisition*. Oxford: Pergamon.
- _____. (1985) *The input hypothesis: issues and implications*. London: Longman.
- Krashen, S. D. and T. D. Terrell. (1983). *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Oxford: Pergamon Press.
- Selinker, L. (1972). Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209-230.
- 文部科学省. (2010). 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』. 東京: 開隆堂.
- Okamoto, Y. (1998). Japanese Students' Foreign Language Acquisition and Learning with Reference to the Five Hypotheses Proposed by Stephen Krashen. Master thesis, Kansai Gaidai University.
- 田崎 清忠 (編). (1995). 『現代英語教授法総覧』. 東京: 大修館書店.
- ホームページ
文部省学習指導要領 (2015年1月30日確認)
<http://www.monbu.go.jp>